真鶴行

松岡隆子

沖波のけぶらひ易き神の留守

岬鼻のうすうす晴れて鳥渡る

鳶舞つて冬青空を拡げけり

句碑の辺の落葉を掻いてひと日足る

舞の字の飛び翔つごとき冬の晴

冬蝶のとび来よ句碑の磨かれて

その奥に鳥ごゑ頻り冬椿

しみじみと師恩の白さ冬椿

むらさきの冬蝶見しは誰に告げん

冬蝶の翅をたためば無きごとし

崖の上の日差しいつ時冬紅葉

考への遠きところを枯葉散る

先日「新松子」の皆さんが真鶴のかもめ句碑を訪ねると聞いて私も同行させてもらった。皆さんは神奈川例会のメンバーでもあり、「栞」創刊以来率先して句碑守を務めてくださっている。皆で句碑への径の落葉を掻き、コロナ禍で三年間できなかった分念入りに清掃に励んだ。昭和六十年に建立されたかもめ句碑は長年「朝」神奈川支部の皆さんが守ってこられた。今こうして「栞」神奈川例会の皆さんが引き継いでくださっていることを思うと感慨深い。朝からの時雨空はいつの間にか晴れ上がっていた。

〈あげ潮の舞を大きく冬かもめ　眸〉。先生の晴れやかなお声が聞えた。